

＜県研究主題＞

コミュニケーション能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 森下 智史（横浜地区）

＜研究主題＞

「子どもが主体的に考え、判断し、表現する力を身に付けるための授業改善」

～ 子どもの声を活かし、仲間同士で学び合う授業～

1 提案内容

横浜市教育課程研究委員会 YICA・外国語科部会の研究主題として「子どもが主体的に考え、判断し、表現する力を身に付けるための授業改善」がある。この「主体的に」とは、子どもが「自ら進んで」考え、判断し、表現しようと思える授業を指すことになる。子どもがこのように感じるには、自分の考え、気持ちを聞いてほしい、あるいは他の人の考え・気持ちを知らりたいと思える「メッセージ」を大事にした授業が必要であると考え、最終目標を「5行詩を発表し、互いに感想を英語で表現し合える」とし、本テーマを設定した。

(1) 実践の概要

① 4人組グループにおける協同学習

- ア 最終目標の「5行詩を発表し、互いに感想を伝え合う」活動に向けて、自分の考え・気持ちを伝える経験の数と、互いに考え・気持ちを受け容れあう心理的な環境づくり。
- イ グローバル社会において必要な、きちんと「言葉で」自己主張できる社会性の育成。
- ウ 主体的な「気付き」による知識獲得と、何かを「生み出す」力を養うため。
- エ アンケート調査に基づいて作成されたソシオメトリーによるグループ編成。

② 文章理解力を養う学習方法

- ア ジグソー学習：個人で異なる情報を持ち帰り、共有する。
- イ コンセンサスを図るリーディング活動：一人ひとりの考え・気持ちの違いをやりとりできる発問を設定し、意見を交流させることで教科書本文の文脈を読み取る力、言語を用いる場面や機能への気づき、会話から感情を伴った対話への意識の変容を目標とする。

③ Today's Topic：会話に基づいた統合的な活動

- ア ①会話の場面で相互理解を深める ②「言いたいことが言えない」ギャップに気づかせる「アウトプット仮説」を狙う。③統合的な力を育成する。④レポートを書く際に、まとまりのある文を作らせることで談話能力を育成する。⑤「少し知らない」表現が混ざった状態でのリスニングとして聞く力をつける＝インプット仮説をねらうという目的がある。
- イ 文構造は問わず、子どもが話したくなるテーマを考えて設定することが最重要。
- ウ 「本当にアウトプットしたい表現」を集めるため」のワークシートの中に「言いたかったけれど分からなかった表現」欄を設ける。→次回以降の Today's Topic で、グループの課題とする。

エ 「反応する」英語表現も「表現したかった」欄に記入させ検証する。→なかなか出てこない→1・2年でほとんど習った表現→新たな課題になる。

(2) 成果と課題（提案資料7ページ、アンケート結果より）

成果

- ① 協同学習の特性を活かし「本当にアウトプットしたい」表現を主体的に再獲得し直すことで、「コミュニケーションを目的とした外国語を運用する活動」を促進するための要素を培うことができた。
- ② グループ学習を用いた結果、「気づき」を引き起こし、有機的に働き合うことで「思考・判断」した事項を英語の「表現」として結びつけることができた。
- ③ 各活動において自ら学ぼうとする姿勢が見てとれ、コミュニケーションへの関心・意欲・態度が育成されたといえる。
- ④ 自分の表現できる日本語表現に言い換える行為は、「方略能力」を育成し、「思考・判断・表現力」を育むものにつながった。

課題

- ① 本研究では、子どもが「本当にアウトプットしたい」表現を主体的に再獲得し直すアプローチ方法を提案する段階までに留まっている。
- ② 再獲得した表現を実際に使用する経験を重ねることで **intake** させる必要がある。
- ③ 「反応する英語」の習得において、言ったことをくり返すことも日常の会話で多いことから、生徒の発表を基点として、**revoice** する活動も入れていきたい。

2 協議内容（参加者と提案者との質疑応答）

(1) Q：グループでの会話・作文活動はどう評価しているのか。

A：形成的評価として、その活動の中から見えてきた課題を定期試験の問題などにしている。

(2) Q：学習課題を生徒自ら考えさせるのは、効果は大きいですが難易度にばらつきがでてしまうのではないか。

A：英語表現の正確性についての評価はしない。その課題を伸ばせるような評価・指導を行う。

(3) Q：5行詩やプレゼンテーション活動などに、入れるべき言語材料は指定するのか。

A：しない。あくまで自己表現に重きを置いた活動であるため。

3 助言

(1) 本研究で重視されていた、コミュニケーション能力の育成と社会性の育成は、今の社会に求められる、「グローバル人材（コミュニケーション能力・他の受容・日本人としてのアイデンティティの表現）」と共通するものがある。

(2) 中教審答申の「英語力は上がってきているが、複数の資料から情報を読み取り処理する能力はまだ低い」と言う課題に、今回の研究で実践されていた「ジグソー学習」はとても有効な方法である。

<研究主題> 「発信力」の育成を目指した指導と評価の工夫・改善—「話す」「書く」活動を通して—
--

1 提案内容

「発信力」、コミュニケーション能力の基礎を育成するなかで、「話すこと」「書くこと」の発信（アウトプット）の活動に対しては、より一層の工夫・改善が求められている。「聞くこと」「読むこと」の指導を継続しつつ、自分自身が伝えたい内容を表現するために必要な、「話すこと」「書くこと」の指導を工夫・改善することが重要な課題であると考えた。

(1) 実践の概要

① 研究内容

ア 「CAN-DO リスト」の作成

各学年、学期ごとに生徒の目指す4技能の学習到達目標を作成した。

イ バックワードデザイン（最終到達目標から段階的に細かい目標を立てる方法）

生徒の学習の進捗状況と自身の指導の振り返りや改善を図った。

ウ 2つの指導計画の作成

教科書中心のAタイプの指導計画に加えて、4技能の到達目標を段階的に配列したBタイプの指導計画を作成した。

エ 2つの指導計画を用いた典型的な授業の流れ

③で作成した、Aタイプの指導で「言語の形をしっかりと学ぶ場」、Bタイプの指導で「言語を自由に使用する場」を設定し、複数の活動をより活発にできた。

② 研究仮説

ア 2つの指導計画→生徒が「話す活動」「各活動」に意欲的に取り組む→「発信力」を高めることができる

イ スピーキングテスト・インタビューテストの実施→日常の「発信」に対して意欲的になる

ウ 帯活動に即興で伝える活動→「即興性の高い発信力」の育成ができる

③ 本研究の柱となる「発信力」を高めるための「話す」活動と「書く」活動

ア 「話す」活動

弾丸 Talk、One Minute Chat、Reporting、スピーチ

イ 「書く」活動

Give Advice to ～.（困っている人にアドバイスを送ろう）、スピーチ原稿作成

2 協議内容（質疑応答）

(1) Q：今後どのような活動を行う予定か。

A：3年生は話す量が増えているが、時系列で話してしまうところが今後の課題である。

(2) Q：判断の基準はどうなっているか。

A：発表でほとんどの生徒がAになるように指導している。

(3) Q：弾丸 Talk の内容は変えるのか。

A：少しずつ変えている。苦手な生徒への配慮で、大きく変えることはしていない。

(4) Q：思考を停止してしまう生徒に対してはどのように対応するか。

A：個別指導をしながら、何度も繰り返し練習し、何かを引き出せるようにする。

3 助言

すべての生徒たちが「何とか英語で表現しよう」「表現を理解しよう」という思いがある。どの活動の根底にも「発信力」がある。

- (1) CAN-DO リストを作成し、4 技能を育成する授業を実践することで、高い目標を達成している。
- (2) 繰り返し学習指導することで4 技能の育成を図っている。「どのように」繰り返すか（繰り返しの質）を高く保っている。
- (3) フィードバックを適切に行っている。活動と活動の間にモデルを提示し、文法指導指導を簡潔に行うことで、2 回目の活動がよりよくできるよう工夫している。
- (4) 評価を考えると、忘れてはいけないのが、指導と評価の一体化である。
- (5) 研究のまとめとして、生徒がどう変わったかはもちろんのこと、教員がどう変わったのかを考えていくことが大事である。

4 協議の柱に即した協議（グループ協議とその発表）

- (1) グループ活動や帯活動が計画的に行われている点を今後参考にしたい。英語を話す意欲と英語の正確さが伴わないことがあり、悩むことがある。
- (2) 主体的に話をさせようとするとき、テーマが難しい。スピーチ形式以外の「話す」活動なども効果的ではないか。毎日の **small step** の積み重ねが大切である。また、振り返り活動を大切にし、自分が成長したことを感じられると、やる気につながる。
- (3) 「発信力がある」とは、「相手意識を持ち、理由付けができる」ということではないか。そのために、場面設定などで、モチベーションを上げる題材が必要である。聞く側の姿勢も、うなづいたり、注目したりなど、必要なところがある。
- (4) 先生と生徒の信頼関係の土壌が大切である。今の中学生が話したいと思うトピックを日頃から教員がキャッチすること、さらに、生徒の発表をビデオに記録しフィードバックすることはとても有効である。
- (5) 発信するための環境づくりが大切である。授業規律を整え、生徒の成長を認めることが1年生時から必要である。写真など視覚的なものを使用すると、時系列での話にならなくなるのではないか。
- (6) 学んだことをどれだけ **output** できるかが、発信力につながると思う。苦手な生徒にはさらに手だてを考え、話したい気持ちにさせることが必要である。
- (7) 1～3年生の目標を明確にし、どういう生徒にしていきたいかを考えることが重要である。ビデオなどで、「こういう生徒になってほしい」と生徒に話すことは有効である。
- (8) 授業で何を狙いにし、どこまでアプローチするかが大切である。受信する側の受信力も大切ではないか。また、発信するときの環境づくりを学校全体でできると良い。

5 まとめ

生徒が自信を無くしてしまう授業は良くない。失敗が許される環境、子どもが「わからない」と言えることは大切である。**Error Correction** を多く行わず、たくさん話させることができたほうがよい。生徒の可能性を信じ、先生の思いを生徒に伝え、生徒の力を伸ばしてほしい。また、生徒のゴールの明確化のために CAN-DO リストの作成が必要である。